

名古屋男声合唱団 団内誌



Agora

第 32 号



2025. 1. 28

◆ 第 32 号 目 次 ◆

新たな曲作りを目指して

- ◆ 第3ステージ: 白秋万華鏡 — 白秋の詩による男声合唱アンソロジー —
理解のために<その1>

T1.高橋昭弘 — 1 —

- ◆ 多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる創作曲をめざして

創作委員会への提供短歌 — 12 —

第3ステージ: 白秋万華鏡 — 白秋の詩による男声合唱アンソロジー — 理解のために <その1>

高橋昭弘

このステージは通常とは異なり、作曲者ではなく作詞者＝詩人（北原白秋）を主題にして編んでいるので、詩人白秋についての理解がどうしても必要と思います。白秋については名前はよく知られているけれど、その生涯や詩作品の全体像については意外と知られていないように思います。

この稿では白秋の人生と詩作について、ステージ構成の順に従って概観していくこととします。参考文献として『白秋望景』（川本三郎著、新書館）、および『北原白秋詩集（上・下）』（岩波文庫）に拠っており、専らそれに依拠して書かれることを予めお断りしておきます。

0. 「柳川」以前＝第一詩集『邪宗門』

このステージは「柳川」（多田武彦）から始まります。それは柳川が白秋の生まれ故郷であることが主たる理由ですが、白秋の詩作の順番からいえば、「柳川」の詩が含まれる「柳川風俗詩」は白秋の第二詩集『思ひ出』に所収されています。

白秋のデビュー作品である第1詩集は『邪宗門』（明治43年・1909年、24歳）です。

ここに収められた詩群は難解というか、華麗な言葉による「イメージ」の氾濫とでも言える様相を呈します。これらの詩が難解とされるのは、これらの詩に「意味」、つまり知的文脈を求めるからだといえます。これらの詩は、意味とか論理的文脈ではなく、言葉の喚起する「イメージ」の世界＝美的表現世界を生み出すこと自体を目的とする作品たちと言えます。

ではその難解さがどのようなものであるか、例えば詩集冒頭「邪宗門秘曲」、5連からなる詩の第1連と第5連を抜き出して見てみましょう。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蛮の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酩の酒を。

<中略>

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の礫 背にし死すとも
惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき 紅 の夢、
善主磨、今日を祈に身も霊も薫りこがるる。

『邪宗門』というタイトルからすぐに、フランスの象徴派詩人ボードレーの『悪の

華』が想起されるように、ボードレール、マラルメ、ランボーといったフランス象徴派詩人の耽美主義的作風に強い影響を受けた若き白秋渾身の処女作品でした。

因みに、その頃白秋は、同じように新しい文学創造に燃えつつも未だ文壇デビューを果たせないでいた、若き日の谷崎潤一郎、石川啄木らと親しく付き合っており、集っては飲み熱く文学を語っていた。

彼らは等しく一世代上の永井荷風を崇敬していたが、荷風はフランスに滞在経験があり、フランス文学。フランス文化全般に精通した文化人であり、新進気鋭の彼らは荷風を通じて、新しいフランス象徴派文学の影響を強く受けていたと言われていました。

そして、その頃白秋、谷崎らは、白秋の故郷に近い長崎に旅をし、そこに残る色濃い南蛮文化の残り香に強烈な印象を受けたことを記しています。『邪宗門』は、世界の新しい文学潮流たるフランス象徴詩の作風と、当時の白秋の濃厚な南蛮趣味とが、混然と融合した作品と言えましょう。

そうした白秋の処女詩集が、気負いのあまり独りよがりですべて読者にとって難解な作品となったことはやむを得ないのかもしれませんが。

この詩集を、後に白秋の書生として弟子入りした若き日の室生犀星は、詩集出版当時これらの詩を読んだ時の印象を「処女詩集『邪宗門』をひらいて読んでもちんぷんかんぷん何を表象しているのか解らなかった」（回想記『我が愛する詩人の伝記』中央公論社、昭和三十三年）と書いています。感性豊かな詩人の卵がそのように感ずる代物なのだから、一般読者にとっては尚のことと言えましょう。

兄を追って東京に出た弟鉄雄が出版の労を一身に引き受け、懲りに凝った豪華な函入り装幀本を作るのですが、自費出版のため出版部数は限定されており、一般読者には、ほとんど読まれなかったものと思われます。

詩集『邪宗門』は、色でいえば赤と金が目立つ豪華本である。「パンの会」の”同志”である画家、石井柏亭による装幀、装画。これに山本鼎の木版画、木下奎太郎のデッサンが加わる。犀星は「菓子折」のようだと評したが、従来の詩集の常識にはおさまらない絢爛たる本だった。

つまり『邪宗門』は、白秋の「文壇」へのデビュー作品であり、この詩集によって彼の詩人としての才能が文学界において注目されることになりましたが、彼の詩が広く一般読者に読まれるようになるのは、第2詩集『思ひ出』の出版を待たなければなりませんでした。

そんな訳で、白秋の詩に作曲された歌曲は、校歌や社歌、軍歌を除いて300曲に及ぶとされていますが、その内『邪宗門』からは6曲しかない（合唱曲はなし）との報告に見られるように、歌にするには不向きな詩であったと言えましょう。

1. 「柳川」＝少年時代・回想

ステージ冒頭においた「柳川」の解説ですが、まず前述の参考文献『白秋望景』からの引用で始めることとします。

はじめに喪失があった。

柳川の沖の端の代々続く海産物問屋であり、作り酒屋でもあった実家は、明治34年（1901）、白秋16歳の時に、大火にあい酒蔵と6千石の酒を失った。以後家運は大きく傾き、明治42年（1909）、白秋の最初の詩集である『邪宗門』が世に出た年の暮れには、ついに倒産した。

北原白秋は没落名家の子である。

明治44年に出版された第二詩集『思ひ出』の序文「わが生いたち」のなかでこの大火の惨事を書いている。

あらゆる桶が日本酒を満たしたまま「真蒼に」炎上した。無数の魚が川に浮き上がった。人々は酒の流れを飲み、泥酔して北原家の母屋に上がりこんで歌い踊った。消火活動どころではなかった。水の町、柳川で水が火に敗れたことになる。火の暴虐が水の平穩を破壊した。のちの白秋が、水への思いを強めるのは、この時に失われた水の平穩を言葉のなかで取り戻そうとしたためかもしれない。

火事のさなか16歳の白秋は、ひとつの光景を記憶にとどめた。愛読してやまなかった、明治30年（1897）に出版された島崎藤村の詩集『若菜集』が燃えてしまったことである。

「私は運び出された家財のなかかにたゞひとつ泥にまみれ表紙もちぎれて風の吹くままにヒラヒラと顛へてゐた紫色の若菜集をしみじみと目に涙を溜めて何時までも何時までも凝視めてゐたことをよく覚えている。」

火事のなかで、何よりも詩集が燃えてゆくことに涙する。実業の道ではなく詩の道に進もうとしている少年ならではの切実な感傷だろう。

この大火のあと北原家は以前にも増して大きな酒倉を作るが、もはやかつての勢いを取り戻すことは出来ず、まるで水のなかに沈んでゆくように没落していった。

そもそも柳川の町自体が、寂しい町へと沈んでいた。旧家はすたれ、山持ちや田地持ちもいつしか「流浪の身」となった。商人たちは門司、佐世保、大牟田など新しい繁華な町へと去った。

「私の郷里柳川は水郷である。さうして静かな廃市の一つである」「水郷柳川はさながら水に浮いた灰色の柩である」という「わが生ひたち」のなかの有名な言葉はそうした、時代から取り残されてゆく過去の町、柳川を語っている。

白秋にとって故郷柳川は失われた町、廃市なのである。現実には過去のにぎわいを失った町というより、白秋の目に、過ぎ去った町としてとらえられたという一点が重要である。詩人は現実の町というより、言葉によってイメージされてゆく幻の町のほうを大事にしている。記憶、思い出という操作によって浮かび上がってくる「あるべき故郷」である。思い出のなかで、逆説的にいえば、柳川は「廃市」としてよみがえった。しかし、現実の柳川の人たちは、自分の町が「廃市」と呼ばれることを面白く思わなかった。白秋は、柳川は廃市になったからこそ、思い出の対象になる美しい町だといっているのに。

この川本氏の最後の指摘（下線部分）は非常に示唆的だと私は考えています。白秋のこの視点、感覚は、白秋の他の詩を読み解く上でも、とても重要なキーワードになるものと思います。

私たちの歌う「柳川」は、このように白秋によってイメージされた思い出の町＝廃市、という詩的世界の町であると言ってよいでしょう。

「柳川」の中で「薊の生えたその家は、古い昔のノースカイヤ」という1節がありますが、詩集『思ひ出』から「立秋」という詩の一節を紹介しておきましょう。

柳川のたつたひとつの遊女屋に
あさみ 薊が生え、
住む人もないがらんだうの三階から
きりきりと繰り下がる氷水の硝子杯、
お代わりに、ラムネに、サイホン、
こほろぎも欄干に

「わが生いたち」によれば、白秋の少年時代には町にはもう遊郭はひとつもなくなっており、これもまた思い出に残る風景でしかありませんでした。

冒頭、「はじめに喪失があった」から始まったのですが、白秋の少年時代の「思ひ出」には、この大火による生家の喪失のほか、父親との確執、チフスによる乳母の死、など少年時代の思い出として語るべき事柄が幾つかあるのですが、ここではもう一つだけ、親友の自死をとりあげておきましょう。（中学時代からの親友であったその友とは、文学を通して交友を深めました。彼はロシア文学に熱中しており、将来ロシア文学研究の道に進む志を立て、既に当時ロシア語の勉強をしていました。）

明治37年（1904）、日露戦争下、中島鎮夫という親友がロシア語を学んでいたために「露探」（ロシアのスパイ）と疑われ、白秋に「苦しいから死ぬ、生きてはゐられない、貴方は私のぶんも一緒に立派に成功してくれ」と遺書を残し、短刀で喉を突いて自殺した。日露戦争開戦劈頭の仁川大勝という号外に柳川の町の人々が熱狂する前夜のことである。

親友の遺体を担架に載せて、白秋は、たんぼぼの咲く野中の一本道を、子供のようにおいおいと泣いて歩いた。

この親友の死を歌った詩「たんぼぼ」も詩集『思ひ出』に所収されています。詩の冒頭に付された添え書きと、全7連から第1連、2連、最終連を抜粋しておきましょう。

たんぼぼ

わが友は自刃したり、彼の血に染みたる亡骸はその場所より静かに釣り台に載せられて、彼の家へかへりぬ。附き添ふもの一兩名、痛ましき夕日のなかにわれらはただたんぽぽの穂の毛を踏みゆきぬ、友、時に年十九、名は中島鎮夫。

あかき血しほはたんぽぽの
ゆめの 逕^{こみち}にしたたるや、
きみがかなしき釣り台は
ひとり入日にゆられゆく -----

あかき血しほはたんぽぽの
黄なる 蕾^{つぼみ}を染めてゆく、
君がかなしき傷口^{きずぐち}に
春のにほひも沁み入らむ -----

(中略)

あかき血しほはたんぽぽの
けふのなごりにしたたるや。
きみがかなしき釣り台は
ひとり入日にゆられゆく -----

当時白秋19歳。少年時代からの無二の親友の自死、というこの痛切な思い出は、とりわけ感性の詩人白秋の胸中に、生涯忘れることのできない深い傷跡として残されたに違いないと思われます。

2. 「片恋」一詩集『思ひ出』の成功

明治44年(1911)、第二詩集『思ひ出』を出したときに白秋は26歳、その出版記念会の席で、発起人の一人上田敏の激賞を受けたことはよく知られている。白秋自身がしるすところでは、上田敏は「言葉を極めて日本古来の歌謡の伝統と新様の仏蘭西芸術に亘る総合的詩集であるとし、而もその感覚解放の新官能的詩風を極力推奨された。さうして序文『生ひ立ちの記』(「わが生ひ立ち」)をさす」については殊に驚くべき賛辞を注がれた。あれを読んで落涙したとまで。さうしてまた筑後柳川の詩人北原白秋を崇拜するとまで結ばれた」

『思ひ出』は明治末の詩の世界に新風をもたらしたものとしてひろく迎えられ、とりわけ「わが生ひ立ち」は、所収の詩作品よりもすぐれているとさえ評価された。

この詩集が出た直後、雑誌『文章世界』で「文界十傑」という人気投票が行われ、「詩

人」の部で若い白秋が一位となった。二位は蒲原有明、三位は与謝野鉄幹、四位が三木露風だった。

こうして白秋は第二詩集『思ひ出』によって、詩人として一般の読者にも広く知られることとなります。

続いて、大正2年（1913）、第三詩集『東京景物詩』（のち『雪と花火』と改題）が刊行されます。私たちの歌う「片恋」はこの詩集に収められています。

『東京景物詩 及其他』は題の示す通りいくらか類型的な都会趣味に溢れているが、詩の書き方としては、『邪宗門』の感覚的表現の系譜を引くものから、『思ひ出』の抒情小曲をさらに様式化した俗謡調まで、さまざまな試みがなされている。

とりわけ「片恋」は、白秋自身に「わが詩風に一大革命を惹き起こした」と言わせ、「私の後の新俗謡詩は凡てこの一篇に萌芽して、広く且つ複雑に進展して行ったのである」と書かせている。

永井荷風は、明治四十三年十一月に、日本橋大伝馬町の三州屋という西洋料理で開かれた「パンの会」（白秋が主宰する若手文学者の会）の例会にはじめて出席した。

この時は、九月に創刊されたばかりの第二次「新思潮」のメンバー、谷崎潤一郎、和辻哲郎ら、やはりこの年に創刊された「白樺」からは武者小路実篤、そして五月に創刊された「三田文学」からは主宰の永井荷風が、と総勢四十人ほどの大きな集まりになった。

明治四十三年という年は、一方で、大逆事件の悲劇があり、他方では「白樺」「三田文学」第二次「新思潮」という文学史上、重要な雑誌が三つ創刊された。光と影が重なりあった年になっている。

この「パンの会」の出席者のなかでは、荷風は別格である。白秋や谷崎ら若い世代から見れば、すでに作家として名声を得ている大先輩である。

当時、若い文学者たちに、いかに荷風が輝いて見えたかは、谷崎潤一郎の回想記『青春物語』がよく語っている。

荷風は自ら主宰する「三田文学」の創刊号で、「昴」に発表されたばかりの白秋の詩「片恋」をボードレールと比べながら激賞した。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片恋の薄着のねるのわがうれひ
「曳舟」の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

「ちるぞえな」という俗語をリフレインに使い、それを洗練させて一篇の詩にしたとこ

ろが素晴らしく「自分は偶然に北原白秋氏が『片恋』の一篇を見出して、これを三唱し得た事を喜ぶのである」とまで書いた。フランス帰りの荷風に絶賛された白秋が感激したのは、いうまでもない。

ちなみにこの詩にある「曳舟」とは、現在の墨田区を流れている曳舟川のこと。戦後、埋立られたが、ここにも「水」がある。そして興味深いことに、荷風は、のちに、曳舟川に近い玉ノ井を舞台にし『墨東奇譚』を書く。「わたくし」と娼婦お雪の別れのくだりを書くときには、「あかしやの金と赤とがちるぞえな」を意識していたかもしれない。

大事なものは、荷風の『深川の唄』や『すみだ川』など水辺を舞台にした小説と、白秋の『思ひ出』がほぼ同じ時期の作品であること。当時の芸術派文学者たちのあいだに生まれた「水の感受性」と呼ぶべき、新しい感覚が共通している。荷風も白秋も、水にひたされている。

興味深いのは、谷崎潤一郎の『刺青』もまた水の物語であること。刺青の彫り師、清吉が美しい娘の肌に蜘蛛の刺青を彫るのは、隅田川べりの深川佐賀町という水の町なのである。

水がデカダンスを引き寄せ、デカダンスがまた水を引き寄せる。このさまは、白秋が『思ひ出』で歌った柳川という、微熱をおびた廃市の光景と重なり合う。

「陸」には、西洋の文明社会に追いつこうとする懸命に生きる前向きの力がある、それに対して「水」の世界には、現実社会から一歩はずれてしまった者の、うしろへと向かう幻影がある。

白秋が『思ひ出』を出版した明治末には、そうした少し病んだ「水の感受性」が、文学の世界を徐々にひたし始めている。

芥川龍之介は、白秋の「廃市」という言葉に誘われて隅田川を見る。そこでは、川は、もう力強いイメージたり得ない。隅田川もまた「廃市」に化してゆく。

芥川は『大川の水』のなかで、大川をヴェネチアにたとえている。

「大川の流を見る毎に、自分は、あの僧院の鐘の音と、^{くぐひ}鵲の声との暮れて行く伊太利亜の水の都ーバルコンにさく薔薇も百合も、水底に沈んだやうな月の光に青ざめて、黒い柩に似たゴンドラが、其中を橋から橋へ、夢のやうに漕いでゆく、ヴェネチアの風物に、(以下略)」

ゴンドラを「黒い柩」ととらえるのは、「わが生ひ立ち」の「水郷柳川はさながら水に浮いた灰色の柩である」を意識しているのだろう。

芥川だけではない。『刺青』の作者（谷崎）もまた回想記『幼少時代』のなかで、生まれ育った東京日本橋蛸殻^{にたり}町近くを流れる隅田川べりの風景をヴェネチアにたとえている。

「前の流れを往き来する荷足船や伝馬船や達磨船などが、ゴンドラと同じやうに調和してゐたのは妙であつた。」

「ゴンドラ」という言葉で明らかなように、谷崎潤一郎もまた日本橋界限を流れる隅田川と、その周辺の堀割のある風景をヴェネチアになぞらえている。そして、谷崎が子供時代を過ごした水辺の町を回想する文章のうしろには白秋の「わが生ひ立ち」が見え隠れしている。

芥川や谷崎は、無論、実際にヴェネチアに行ったことはない。それでも彼らがヴェネチアを引き合いに出すのは、その前にヴェネチアを語った作品があったからである。

森鷗外が約九年の歳月をかけて訳し、明治三十五年に春陽堂から出版された、アンデルセンの、イタリアを舞台にした、青年の成長の物語『即興詩人』である。

おそらく日本人が「ゴンドラ」を知ったのはこの鷗外訳の『即興詩人』によってだろう。白秋もまた『即興詩人』を読んだに違いない。

森まゆみは、『「即興詩人」のイタリア』（講談社、2003年）のなかで重要な指摘をしている。

その（注・ゴンドラ）長く黒い姿を「水の上なる柩」という、このイメージは北原白秋が故郷柳川を水上の灰色の柩とうたうときにも引きつがれていよう。

白秋は、鷗外訳の「即興詩人」のヴェネチアのゴンドラ、そして「水の上なる柩」という言葉から、柳川を「水に浮いた灰色の柩」と見、さらに「廃市」のイメージを作り出していったことになる。西洋の文学を通して「水」を発見し、故郷を水の町として懐かしく思い出す。その文章がまた永井荷風や芥川龍之介、谷崎潤一郎を水辺へと引き寄せる。新たに発見された水辺の風景によって、西洋と日本が響きあっている。

森まゆみはさらに、大正四年に吉井勇が作詞した「ゴンドラの唄」（作曲・中山晋平）、かの黒澤明監督『生きる』で志村喬が歌ったことで広く戦後世代にも知られる、あの歌もまた鷗外訳『即興詩人』の強い影響のもとにあったという。まさに「いのち短し 恋せよ乙女」をそのまま使っている。（筆者注：因みに吉井勇は、白秋主宰「パンの会」の設立同人でもあった。）

川本三郎は引き続き、白秋の詩の特徴として「色彩」を詳細に検討しています。川本氏の論考の一部を抜粋しながらたどってみましょう。

はじめに色があった。

白秋の詩や短歌には色彩が溢れかえっている。

たとえば、いまでも親しまれている童謡「赤い鳥小鳥」の歌詞「赤い鳥、小鳥、なぜなぜ赤い。赤い実をたべた」（「赤」は二連では「白」に、三連では「青」に変わる）。あるいは「からたちの花」の「からたちの花が咲いたよ。白い、白い、花が咲いたよ」（「白い、白い、花」は二連では「青い、青い、針のとげ」に、四連では「まろい、まろい、

金のたま」に変わる。)

白秋がとりわけ好んだ色は、赤と金だったことは多くの論者が指摘している。

赤は夕日の色であり、それは倦怠、退廃をあらわしている、とか、あるいは逆に、それは青春の情熱の色であるとか、あるいはまた血のしたたる情念の色である、といった、赤への意味付けは、恐らく白秋にとっては大事ではない。ただ「赤の発見」一、赤という鮮やかな色を目に強くとらえ、それを詩のなかに、本のなかに、溶かしこむ、その喜びこそが若き日の白秋の心を震わせていた。

それにしてもなぜ赤なのか。

美術評論家の高階秀爾は「明治の色」という短いが、刺激的な文章のなかで、北原白秋の『邪宗門』『思ひ出』を貫くもっとも鮮烈な色彩は赤であると指摘し、同時代の大正二年に刊行された斎藤茂吉の歌集が『赤光』であり、そこにも白秋の場合と同じように「のど赤き玄 鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」「いちめん唐辛子あかき畑みちに立てる童のまなこ小さし」など赤のイメージが随所に見出されることから、こう判断している。

「明治の末年から大正にかけての時期が、赤と朱に陶醉した時代であった」と。

赤はめまぐるしく変化する近代日本の激動である。白秋の「赤の発見」も当然こうした、高階秀爾のいう「赤と朱の時代」を反映している。

それまでの日本の紅色とは違った西洋の赤が近代日本の社会に徐々に入ってきている。白秋はその新しい色の鮮烈さに心を奪われ、それを詩歌に採り入れようとした。赤への意味付けは大事なことでなかった。まず何よりも、新しい色の新鮮さに目を見張るその感動が白秋の詩歌を支えた。

白秋という思想性がないとよく批判される。白秋のあまりにきらびやかな言語感覚に、結局は、白秋は言葉と戯れているだけで、その奥に深いものがないと、斥けてしまう。

しかし、白秋の「色彩詩人」としての作品を見てゆくと、白秋にとっては、光や色彩を発見し、それを見つめてゆくことこそが思想だったのではないかと思えてくる。色彩への鋭敏な感受性、感覚そのものが思想になりえている。(棒線筆者)

また川本氏は「あかしや」について着目しながら次のように続けている。

あかしやの花ふり落とす月は来ぬ東京の雨わたくしの雨 (短歌集『桐の花』)

街路樹として植えられた「あかしや」にやさしく雨が降りかかる。そのなかを「わたくし」が歩いている。近代の東京の一風景が浮かび上がる。ちなみに西田佐知子が歌った昭和三十五年のヒット曲「アカシヤの雨がやむとき」(作詞・水木かおる、作曲・藤原

秀行)は、白秋の歌に想を得たのかもしれない。

白秋はよく知られた「片恋」でも「あかしや」を取り入れている。「あかしやの金と赤とがちるぞえな」。アカシヤの葉が光を浴び金色や赤色になって散ってゆく。

島田謹二は『日本における外国文学』(朝日新聞社 昭和五十年)のなかで「片恋」を論じ、「あかしや」という木は、明治になって西洋から移入された新しい木で、丸の内のお堀端などに植えられたとしている。

白秋は日本人には新しい木を歌のなかに取り入れることによって、それまでの花鳥風月的な世界とは違う色彩を出そうとしたのだろう。その点で、島田謹二は興味深いことをいっている。

「あかしやの金と赤」というのは、ひじょうに考えぶかく配置された語法である。それが「あかしや」の真赤な金色の葉のことをさすのは言うまでもない。「金と赤とのあかしや」というとはちがって、「あかしやの金と赤」となると、「あかしや」の葉そのものよりは、色彩そのものに、しかも金と赤というぎらぎらする原色の燦爛に、読む人の印象を集中させる語法になっている。

白秋がいかにも、色彩を表現することに工夫をこらしたか、をよく指摘している。色彩のひとつとして「光」も取り入れられる。ちょうど印象派の画家たちが、光に魅了されたように、白秋もまた「光」を大事にする。

川本氏の色彩に関する論述は更に詳細を極めているのですが、これくらいに止めます。

川本氏の着目した、「水」と「色」という視点から、改めて「片恋」を見直してみましよう。

最初の1行「あかしやの金と赤とがちるぞえな」、冒頭から白秋がもっとも愛した色とされる「赤」と「金」が現れます。はらはらと散るあかしやの葉が、朝の光に照らされて輝いています。「薄着のネル」「曳舟」の水のほとり」「やはらかな君が吐息」といったどこか艶っぽい言葉の連なりが、前述の永井荷風作品などとの連想から、墨田、曳舟川のほとりの私娼界隈を想起させますが、白秋はそれ以上の具体的な描写をしている訳ではありません。ただ「薄着のネルのわがうれひ」「曳舟の水のほとりを行くころ」「吐息がちる」と歌い、何が行われているかを具体的に描写してはいません。

ここで、先に「柳川」の箇所では指摘した棒線部分を思い出しておきましょう。「詩人は現実の町というより、言葉によってイメージされてゆく幻の町のほうを大事にしている。」

ここでもまた、白秋にとって、現実でそこで何が起こったか、が重要なのではなく、あくまでも言葉によって立ち現れるイメージの世界の喚起こそが最大の関心事なのです。

この詩の中で、言葉が喚起する「イメージ」、或いは「形」ではなく、何か「内容」を表す言葉を探し出すとすれば、「わがうれひ」でしょうか。あわあわと立ち上がる「憂い＝メランコリー」のような気分。それはこの時代を映す雰囲気ではあるのですが、白秋は「それ」を決して表現しようとしたのではなく、彼が表現したかったのは、あくまでも「言葉の構築による(仮構の)美の世界」だったといえるのでしょう。

永井荷風は、現実生活においても色街に身を置き、そうした体験に基づき「墨東奇譚」などの作品を書いたのだが、白秋の実際はそうではなく、あくまでも九州の良家出身の奥手のぼんぼんだった。

そのことを語るエピソードとして、当時白秋と親しかった石川啄木の日記を紹介しておきましょう。

「北原君などは、朝から晩まで詩に耽っている人だ。故郷から来る金で、家を借りて婆やを雇って、勝手気儘に専心詩に耽っている男だ。」と「お坊ちゃん」の白秋を評している。その啄木が、当時、私娼の町として知られる浅草の十二階下（十二階とは、当時としては稀な十二階建の高層建築、浅草凌雲閣の俗称）に白秋を連れてゆく。明治四十二年二月八日にこうある。

「それから北原と二人で浅草に行き、新松原でにのみ（略）、二人ともよってゐた、そしてとんだ宿屋へとまってしまった」。

白秋が詩人の大木惇夫に「僕に童貞を破らせたのは石川啄木だよ」と語ったというのはおそらくこの日のことだろう。

これは白秋二十四歳のこと、そして『思ひ出』の刊行はその二年後です。

この件と関わって、川本氏は次のように興味深い論をすすめていますので紹介しておきましょう。

白秋が童貞を失ったのは、明治四十二年二月八日のこととすれば、興味深いことが起こる。官能の解放を歌った『邪宗門』の多くの詩が書かれたのは明治四十年、四十一年であり、とすれば、白秋は、童貞のままに官能の魅惑を謳いあげたことになる。

『邪宗門』のあの華麗なる言葉の大伽藍はなまの現実というより、あくまでも西洋を憧れる詩人の頭のなかで考えられた感情の表出だったといえることができる。大伽藍は、同時に近代日本の現実に根ざしていない蜃気楼だったのである。大伽藍が実は蜃気楼、そこに、近代日本の困難な歴史を生きた白秋の悲劇、悲しみがある。

「片恋」の世界もまた、その延長線上、「なまの現実というより」、「華麗なる言葉の大伽藍」であったといえるでしょうか。

なお、大正という時代について、また、白秋の詩と思想については、後に触れようと考えています。

<続く>

多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる創作曲をめざして

創作委員会において、多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる創作曲作りに役立ていただくために、皆さんから応募していただいた短歌です。(p.22～23 に掲載した「創作委員会ニュース 2024.10.6」参照)

縦書きで投稿されたものを含め全て横書きで記載(投稿者五十音順)しました。短歌中に明確なスペースや句読点が表記されているものはそのままにしました。また段落を変え、分ち書きされていたものは記載頁数を少なくするためにスペースで対処しました。

短歌の前段の＜ ＞内に最小限の前書きを記載しました。

〇BI 稲守 宏夫

＜64 歳、高齢者と呼ばれる頃がんが見つかった時(他人事と思った)＞

「がんですね」 画面に向かい 医師語る 僕の動悸を 知るや知らずや

＜75 歳、「後期高齢者」なって(役人どもがつける名称に腹立った)＞

高齢者 「後期」がついて 邪魔者に？ 意地でも長く 生きてやる！

＜天寿を全うした義母を送って＞

ありがとう 義母言い残し 眠るごと 我気が付けば はや八十爺いず

＜子たちに言い残せと言われて＞

伝えたい ことは山ほど あるはずが 書こうとすると ペン動かず

＜阿智村「棄民」演奏会を終えて＞

ナーズムと 二度の「棄民」を 終えた我 終わるつもりが 今日また歌う

＜仕事に出かける前夜＞

ああすれば こうなるはずと 思いつつ 図^え面を前にして 線は踊らず

＜最近喪中はがきを受け取って(2 百万円の陽子線治療が転移防げず)＞

同病の 幼な友がき 先に発つ 先進医療も 万能ならず

〇BI 岩崎 省三

古希近し ^{わかげ}若氣同期の 宴酔い 話題 今から 何をせんとす

老い感ず 時に 思うは まだこれから 若き我らの 声今響け
いつまでも 未来に 在りし ^わ我が^お老いを 思い忘れて 今日も忙し
出来たと 喜び感じ 老いもよし 言い訳せずに 生きてゆきたし
何よそれ 若者ことば ^わ我が^{はたち}二十 ロッキードなど 今も記憶に

OB2 尾関 信夫

えーとえーとこれそれあれとイラついて要の言葉なんだったつけ
さあやるぞ気合のサンバリズムにハズレ相方視線が冷たく刺さる
頑張ってやっと思えた歌詞なれどするりと逃げる一晚眠れば
歌の友静かに旅立ち知らせ受け遥かな友にをそつと口遊ぶ
駐車場私の車どこいったかみさん荷物が早くと急かす
老いるとはこんなことかと昔父嘆きの意味がしみじみ解る

OT2 小野 幸義

<義兄 隆さんの葬儀を終えて 10 首>

病室出て 見送る^{あに}義兄は悲しげに 今生の別れと その眼は覚悟し
見舞から 二か月経って ^{あに}義兄は逝く ベッドで握った 手の感触今も
葬儀の日 涙こぼさず お茶を入れ 口数多い 姉は気丈なの?
看病の 修羅場超えて 本音去う 姉にだれも 異論唱えず
親戚が 揃う葬儀は 非日常 瑛磨ちゃんは 「Believe」歌う
斎場で 耳に残る ボイラー音 この世とあの世の 不協和音
冷たい ^{あに}義兄の額 触れてから 3 時間後に 白骨となり
骨壺を 抱いて帰る 車の中 おしゃべり止まらぬ 姉たち三人
帰るとき 話しかけても 目はうつろ 疲労ピークの 姉が心配
^{あに}義兄偲び 待合室で 歌 10 首 詠むごとに あふれる涙

OB1 川口 元一

<2024.10.16>

酷暑去り 涼風受けて一万一千歩 八十四歳まだまだいけるぞ

<2024.10.17>

広場にて妻の車椅子押しゆけば 聞こえる言葉は日本語少なし この国の変化を思う

<2024.10.19>

八月に男女の友らと約束す 新年会には必ず会うのだ

OT1 木村 隆夫

<作年末に入会した短歌教室にて 5 首、うち前 2 首は華原の会の生け花(11 月日本高齢者大会)を観て>

日にやかれ雨にうたれし野の花よ晴れの舞台にいま咲きほこれ

店頭にならぶことなき花なればどのひと花もまこと美し

一年の流れし能登に涙雨手合わす人も瓦礫も濡らし

おさな子に将来のゆめを問ひたれば「五さいになること」と答へたり

何事もなく過ぎたりしお正月胸なでおろすは能登のみにあらず

OB2 久野 学

久し振りに 見た会社 OB の 老いた姿に愕然 長き風雪の日々を思う

明日には 天国行きが分かっている 今日から始めるぞ、フランス語の勉強
ボンジュール
“Bonjour”

OB2 酒井 博世

< 貧困児童の学習支援の場にて >

学ぶ場に 恵まれざりし 子ら集い 共に語らう 心の内外

< 日課としているウォーキング中に、3 首 >

チャイムなる 校舎の横を ウォーキング 子らのざわめき 伝わり来る

運動会 大縄跳びの 練習に ステップ合わせ 飛び跳ねてみる
日曜日 吹奏楽の 部活あり 飛び跳ねる音 目立たなくなり

OB2 酒徳 正司

職を退き 妻と向き合い みずからの 語調の変化に 驚き至り
孫ら来て 台風の如く 過ぎ去りぬ 静けさの中 妻と茶を飲む
禅寺の 無言の石に 問いかける 今の生き方 間違いなきや
石庭の 十五の石は 語るらし 少欲知足 世道人心
畦行けば 伊吹風の 風緩み 路傍の草も 下萌え始む
寒天に 白き峰なる 伊吹山 濃尾のかなた 巖と聳ゆる

OBの 合唱仲間 集う刻 髪白けれど 声は響きて
青春の 想いそれぞれ 込めながら 響くハーモニー OB 合唱団

OT1 高橋 昭弘

<山陽新幹線車窓の空を見ながら、ノーベル平和賞ニュースに接して。>
曇天の空雲切れて陽光射す^{ひかり}ノーベル平和賞被爆者の願い世界へ
<翌朝投宿先で授賞式のテレビニュースを見て。3 首>
核兵器人類と共存し得ず田中さんの声力強く響き
壇上の被団協代表にスタンディングオベーション万感胸に我もまた
オスロの街平和のトーチで埋め尽くし被爆者の遺影と共に No More Hiroshima!
<冬の白浜温泉で露天風呂に浸って。>
ゆらゆらと湯にからだあずけ世を忘れた海と空と風と私
<紀州白浜で南方熊楠記念館を訪ねて。>
知の巨人南方熊楠訪ね来て探求の足跡^{そくせき}ただ眼を見瞞る
きのう惑ひけふも惑ひてあしたまた、思いもかけじ揺れうごく八十二われ

○T2 谷野 善憲

少し前 いともたやすく できたのに 細かい作業と 両肩まわし

○B2 土居 修

正月に遊びし孫と ガザの子どもたち 同じ命と言うのは簡単

足のうらに名前を書いてと たのむガザの子 トイストーリーが思い浮かぶ

○B2 藤田 仁

バイバイとバグして帰る孫娘成人までの 15 年われは生き永らえられるのか

家族をつなぐラインネットワーク孫らの近況 婆には届くも爺には届かず

子や孫に囲まれ笑う我妻に幸せやれたと一人思う

健診で高音聞こえぬわが耳に妻の小言のソプラノは響き渡りけり

○B1 福井 稔

終りまで 書きつづけるかと 願いつつ 今年も買う買う 3 年日誌

臨終には 言うてやるぞ “ありがとう” ロやかましき 女房さまに

歩きながら 何をしたいかと 自分に問う ヨチヨチ歩きの リハビリ散歩

結婚を しあわせだったと 思うかと 聞いて見ようか 怖さ見たさに

○B2 松田 昌展

この想ひ 誰にあずけて ながめおかむ 心に余る あけ方の雨

注)1 月 28 日にメール送信した Agora 第 32 号に福岡さん短歌を追加しました。

休団者

○T2 福岡猛志

<中井よ、堀よ> 注)同期である故人の B1 中井 二三雄さん及び B1 堀 汎さん

馳せつける力はあらず許せよと弔意の残光に投げかけるのみ

しゅゆ

須臾の間の感あれど我ら出会ひしは六十八年前の若き日

縦横に路面電車が走りいて十三円で乗れたる時代
自らの喉の他には楽器など持たぬ我らの男声合唱
全日本四位で歓喜するほどのレベルなれども懸けし青春
「蛮声の雑唱団」と揶揄をする ESS の奴らも居たが
エロチック スケベ ソサイアティなりと返して溜飲下げたることも
くとりわけ中井に>
君の指揮で合唱曲中のソリストをつとめしことも夢の彼方に
学食の三十五円の天井を分けて食せしゲルピンの日よ
コーヒーの二杯でねばる三時間音楽喫茶琥珀とウィーン
アンドレ・ジイド訳本あるぞこれにしよ授業選びの基準はここに
テキストになき部分まで訳せしと教室啞然やがて爆笑
床に落ちたる球を拾ひて「いいい」三箱弾き出したる技も見せたり
屋台にて仙台は学都名古屋は問われバチ都と答へし君よ
下駄履き友鮎豆煙管甦る下駄では行けぬ^{こたび}此度の旅は
俺はまだしばらく行かぬと告げてくれ彼岸で寺田に出会ったならば
くそして寺田よ>
訳本をつつかえつつかえ読む技で教授騙しつ英書購読
奨悪金なりと称して支給日は直行したりパチンコ屋へ
学生と分かればツケ効く店ありき滝子界限桜山にも
ゲルピンにリーベ メツチェン エスケープかかる言葉も稚気のうちなり
教室は六連隊の旧兵舎再会したり明治村にて
ポスターの惹句信じていたりしよ「今日も元気だ 煙草がうまい」
「飼い犬の手を噛む行為」と文句言う君の煙草をくすねし親に
百円を千円に変へる手品見て息子は貯金箱へと走る
道一筋に価値認めれば雀^{じゃんじゅ}綬褒章あるべしと言ひ卓を囲み

千種区の青柳町こそ恋しけれ友の住む家我らの定宿
フランク永井あんな高音歌へぬとバス・バリトンの声裏返る
＜追悼拡がりて、S 君へ＞

やむを得ぬコロナ下といへ時を経て届く訃報が胸突き刺しぬ
家族葬で送りしといふ挨拶状故人の遺志と言えは詮無し
君はふと思はざりしか直接に逢って別れを告げたきものと
かつて訪ひし君の生家は坂道を昇りて街を見下ろす処
古民家の風情ただよふ軒先に主なき燕の巣が残る家
四つ建ての太き柱にさり気なく大黒天の札貼りてあり
縁に座し庭の山茶花賞でしこと酒は日本酒肴は煮干
尾を振りて縁のわれらに寄りて来き柴犬コロのその後知らず
＜米寿雑感＞

老人性センチメンタル症候群完治困難共生すべし
来し方の追憶ばかり残日に思ひ及ばぬ米寿新春
「恥ずかしきことの数々」寅さんの定番科白は我の真情
さだまさし歌ふあの日の別れ道選び直せることもあればと
その先に見へし景色に目を瞑り別路選びし我若かりき
関はりし人皆鬼籍に入れたれば岐路荒寥と我ひとり立つ
瘦我慢^{とき}粹に見へたという時代をそのまま抱へこの歳までを
後悔あるにきまつてゐるじゃないかされどアイティディットマイウェイ
日残りて昏るるにいまだ遠しとて我を励ます周平節は
寅はいう「それを言っちゃあおしめえよ」メリケンのトラ妄言ばかり
手術するリスクと余命のカレンダー天秤にかけよと医者は温顔
ロダン作「カレーの市民」「地獄門」我は加齢を「考える人」

歳相応ではなく良いのか悪いのか知りたき聴力検査の結果

不満顔の我に主治医が繰り返す加齢除き診断は無理

回復の実感なきまゝ唐突に切り下げられて「要支援1」

<方言アラカルト>

生れも育ちも神田の祖父の「ひ」と「し」との区別がつかぬ江戸の方言

父は江戸母は浪速で住む尾張三方言を操る我は

方言を解せず教師に詰められし転校生に友らは優し

「ひしこいて」尾張弁をばマスターす担任教師に叱られぬため

收拾のつかぬ事態を表すに終え尾張弁よし「もうわやだがや」

尾張弁「やりきやらきやあて」のニュアンスは共通語では出せぬと思ふ

「方言にきれいきたにやああらすか」とわざとらしさが過ぎれば「きたにやあ」

方言は臨機応変にて用ふ地元の古老と言はれて久し

東京弁使ふが故に生意気と言はれたること信じられるか

介護保険の利用者長寿祝ひより除外の市政あなメデタヤな

酔談を我が欲る友のあらかたは彼岸に在りと気づく雪の日

職退きて白き手帳に朱で記す護憲集会午後一時より

隣町まで集団で行進す学校行事の映画鑑賞

ラブシーン教師が映写機手で塞ぐ夜の校庭の敷布銀幕

<入院を振り返ったら>

二か月後移転するとふ思い出のごとくに入院薦められたり

正式の病名はやたら難しい漢字が並ぶと書類で知りぬ

改めて我が年齢を気づかせるペースメーカー耐用年数

十二年ペースメーカー保つといふ平均余命ははるかに越える

臨場感あふれる集中治療室梗塞・挫傷・覚醒途上

病棟の廊下は夜も鎮まらず行き来の看護師時には走る
隣りベッドのブラジル人は顔に似ぬか細き声で夜半に歌ふ
友の悼を抱へて入院退院の直後にもまた逝去の報せ
入院の前後に手足もがれたり露の世ながらの思ひ深めて
病院の移転先には指呼の間に市営斎場在りとは知りぬ

【Sing & Talk の皆さんより】

○稲守 由紀代

その^{とし}齢になって初めてわかるもの 母の言葉が今は身に沁む
白内障段差がこわいという吾に 差しのべくれる友の手のぬくもり
白内障夜道が見つらい老夫婦 一緒につなぐ手のあたたかさ
うしろから呼んでも気づかぬわが犬 声のかわりにそっと手を置く
誕生日長生きしてねと祝われて 八十二の老人と^{としより}やっとなり自覚す
ありがとうこの先何度言えるだろう 今日の会話を思い出しつつ

○小林 明子

主逝き 通う物無き 枯葉道 白き芋虫 息潜め居り
また観てる 送料無料のBSショップ オシャレ可愛い 細見えパンツ

○白井 友子

一人身の老いの暮らしに 猫が来て 愛しき命 生きる力に
背が縮み 顔も年々母に似て 昭和の暮らし いつしか引き継ぐ
母恋し昭和も恋し ああ令和 タイムスリップ 雲流れ行く

○田中 明美

目覚むるに 朝か夕べかもしや宵 暫しうろたふ 午睡のあとに
テレビから ラ・カンパネラ流れおり 葬送曲にと夫に頼みし

○原 和代

亡くなった 母の年齢とうに越え 古希のわが身が 信じられずに

○槇本 征子

筋力と 知力蓄え 老い払い 楽しく過ごす 追い込む人生

○森 和代

人間界 だけではないです 高齢化 高速道路も 橋も線路も

○柳生 恵子

アンチエイジングいつまで抗うと思いつつ飲み続けるサプリメント

八十路人本に元気ですねと言いたれば元気な人しか出てこないよねと言いつ

その歳にならねば解らぬと言いつ亡き母の年近し我後期高齢者

創作委員会ニュース

2024.10.6

○この間の経過

・メンバーと日程

メンバー：高橋（T1）、杉浦（T1）、木村（T1）、稲守（B1）、川口（B1）、酒井（B2）

日程：7月21日（日）10：30～12：30

9月15日（日）10：30～12：30（9月1日（日）は台風のため延期）

ほかに随時メールで意見交換

・この間候補に挙がった作品・テーマ

①主に検討の対象となり選首も行ったもの

萩原慎一郎『歌集 滑走路』角川書店、2017年（三枝昂之の挽歌と合わせて）

若き非正規歌人の思い

永田和宏『歌に私は泣くだらう一妻・河野裕子闘病の十年一』新潮社、2012年

夫婦愛の物語

小高賢『老いの歌一新しく生きる時間へー』岩波新書、2011年

老いの百景

②その他、柴田トヨ『くじけないで』（98歳女性の詩集）、ウクライナの戦争俳句「地下壕から届いた俳句」、中村哲の『天、共に在り』など一連の著作、を取り上げた

○テーマと素材（作品）

(1) テーマ

多様で個性的な「老い」をリアルに見つめる

①なぜこのテーマか

- ・我々にとって最も身近なテーマであり、現実の体験や思いをもとに作品を作り歌うことができる。
- ・人生100年時代の到来で30年を超える人生の新たなフロンティアが出現。従来の「老い」のかたちが消滅し、一括りにできない「老い」の多様化・個性化の時代。
- ・高齢者の貧困と孤独の深まり。生活苦で働かざるを得ない高齢者の増加、死別・離婚で孤立を深める高齢者の増加。「老い」の分断・格差拡大がすすんでいる。
- ・高齢者の自己表現のひろがり。短歌、俳句。川柳、詩など。とくに短歌は「老い」のリアルに迫る格好の素材。
- ・しかし、新しい「老い」を正面から見据えた曲がない（安手の自虐ソングはあるが）。

②リアルに見つめるために

- ・「気取り」「見栄」「カッコつけ」はやめて（控えて）「みっともないこと」「恥ずかしいこと」も正直にまっすぐに。体力・気力の衰え、病気・ケガ、さまざまな失敗、老人の恋愛、年寄りの冷や水など。
- ・年代による違いが大きい。60代、70代、80代、90代の違い（黒井千次の2005年73

歳『老いのかたち』中公新書～2024年92歳『老いの深み』中公新書、の一連の著作参考)。「老い」のとらえ方は百人百様、自分を年寄りと思っていない人、年齢より若いと思っている人は多い。それも今の「老い」のリアルな現実。

- ・男女の違いが顕著。元気で前向きな女性、しょぼくて愚痴の多い男性。男性の自己認識と女性の客観的評価のくいちがいもある。男女の歌の対比、夫婦の歌の対比も興味深い。「老い」のリアルに迫るためには女性の視点が不可欠。
- ・若者の老人に対する気持ちにも敏感に。「豊かで元気な高齢者」「切れる老人」「暴走老人」「逃げ切り世代」などの「嫌老感」をもつ若者も少なからずいる。「ハローワーカー」「PLAN75」「高齢者の集団自決」のすすめ、など。

(2) 素材 (作品)

①さしあたり小高賢『老いの歌』(岩波新書、2011年)

- ・「老いの百景」(第2章)を中心に歌人と素人の歌の両方から
「老いの時間—身体・病・労働・食」
「悟れぬ、悟らぬ—うずまく感情とエロス」
「〈戦後〉を生きながら—戦争の記憶、死者への思い」
「砦としての家族—親子、夫婦、そして…」
- ・ただし10年以上前の著作。歌も古いものが多いので、その後の状況の変化を考慮して追加する必要

川口さんの追加主題の提案

生涯教育・リカレント教育、コミュニティ参加・社会貢献、働き方の多様化・継続雇用、医療への関心・健康寿命の延長、老大人の恋愛など

②団員やその関係者の作品

- ・短歌をすでに作っている人が少なからずいるのではないか
川口さん(B1)のお母様(後で紹介)、福岡さん(T2)など
調べればもっといるのでは。団員の家族、知人、S&Tなど友好団体に範囲を広げて(とくに女性)
- ・団員とその関係者でこれから作る

○ということで、作品(短歌あるいは詩)を募集します！！

- ・創作曲作りに役立てるほか、アゴラに掲載し団員交流に資するよう活用します。

(参考)川口さんのお母様のうた

幼子のごと我がなすまのひげづらの夫は明治の男なり
躓きて眼鏡は飛びぬ毀れたる眼鏡拾えばかなしさ溢る
ありがとうありがとうを繰り返す夫見てあれば老は悲しき
眠られぬ夜を病む夫の顔眺め激しくなりゆく雨の音聞く

にわか歌人のうた

病院に入りて気づく忘れ物マスク自販機二枚百円
病院の附設売店にぎわいて甘き草餅おみやげに買う
心臓は規則正しく脈打てり医師の言葉に抑揚なくて
脳梗塞なってもよければいつなりと薬やめたら嫌味な言い方